

敗北の代償 |



魅惑の

に引き込まれて

囚われたエレメンタルブルー

西暦××××年。

突如、ダークスレイブという謎の侵略者達が地上を襲い始めた。

人々は為す術もなく蹂躪され、世界は闇に包まれていった。

そんな絶望の中、八百万の神の力を秘めたエレメンタルクリスタルが発見された。

日本政府は力を合わせてそのエレメンタルクリスタルを使いエレメンタルガーディアンシステムを完成させたのだった。

日本中の男性が適性試験にかけられ、男子高校生の鈴木蒼紫は選ばれてしまった。青いレオタードに網タイツのコスチュームに蒼紫はため

いきをつく。

予想通り、一番年若く見目麗しいの蒼紫の活躍は性的に歓迎された。

蒼紫はダークスレイブの侵略から日本を守るエレメンタルガーディアンとして、日本中の特殊な性癖を持つ男たちの性的コンテンツとして、日々戦い続けていた。

「クッ！」

蒼紫は剣を振るい、ダークスレイブを斬り捨てる。

「ぐあああっ！ おのれえ……っ！」

怪人が倒れ、消滅する。

だが今日はすぐに次の敵が現れた。今度は三体の怪人だ。

「くそおっ！」

蒼紫は水の剣を振るうが、一体にかわされてしまい、もう一体の攻撃が迫る。

（やられる……！）

衝撃と共に気を失った蒼紫は目を覚まして自分が見知らぬ場所で鎖に繋がれていることに気づいた。

「……っ」

「目が覚めたか、エレメンタルブルー。いや鈴木蒼紫」
名前を言い当てられ蒼紫の背中に冷たいものが落ちた。

「ククク……お前は俺様が直々に甚振ってやる」

「ダリウス……っ」

敵幹部のダリウスが手に鞭を持ち蒼紫を見つめる。その瞳は加虐心に

燃え、分厚い舌が唇を舐めた。

「まずはこうしてやろう」

ダリウスが指を鳴らすと戦闘員が壺を抱え現れ、繋がれている蒼紫の体にドロリとした液体をぶちまけていく。

「——っ！」

液体が触れただけでパワースーツを着ているにもかかわらず体が熱く疼き出す。

体にフィットした青いレオタードの下で乳首がギンと勃起し、尻穴がヒクヒクと疼きだす。

「な、なんだ……っ」

「クク……俺様の調教液は特別製でなあ？」

蒼紫の体の変化をダリウスは嘲笑い鞭を振るう。パシンと鞭の音が響き蒼紫が悲鳴を上げるが、その声すら甘く濡れていてダリウスの嗜虐心を慥めるだけだ。

「あぁっ♡」

鞭で打たれてもスーツには傷一つ付かない。だがスーツを通り抜け皮膚から浸透した液体が神経を犯し快楽を伝える。

蒼紫は普段の聡明な姿からは想像出来ない、舌を垂らした恍惚の表情を敵に晒している。

「鞭で打たれたというのに喜んで雌犬のごとき声を上げるか、はしたないな」

ダリウスが笑いながら乳首目掛けて鞭を振るい続けると、蒼紫の体が

ビクビクと痙攣しはじめた。

「……っ……く……っ♡」

「どうした？もう限界か？」

（僕がこんな奴に屈するわけには……）

だが快楽に逆らえず体は反応してしまう。

ダリウスの鞭は打たれるごとに快感を覚える特殊な鞭で、狙われ打たれる乳首が敏感になっていく。

「まだまだ強烈なものをくれてやろう」

乳首を狙ってダリウスが鞭を振るう。

「~~~~~~~~っ♡♡」

声にならない悲鳴をあげて蒼紫が体を痙攣させる。スーツ越しにも分

かるほど勃起した乳首を、さらに追い詰めるようにダリウスの鋭い爪が押し潰す。

「あゝあぁっ♡や、やめ……ッ！」

（この感じ、何……っ）

痛みは感じるもののそれはすぐに快楽にすり替わり、頭が真っ白になるほどの快感を与えられる。

「あんっ♡あぁっ♡あっ♡や、やめ……ッ！」

「ククッ……いい声で泣くじゃないか。もつと啼け」

ダリウスが鞭を振るうたびに蒼紫の体が跳ね上がる。スーツ越しでもわかるほど乳首は勃起してスーツの股間部分は染みを作っていた。

「はぁ……んんっ♡」

（な、なんで僕こんな奴の鞭で感じてるんだ……）

「ククッ……もう限界か？だがまだ終わらせんぞ」

さらにダリウスは乳首を狙い執拗に攻め立てる。その度に蒼紫は甘い声を上げ、体を痙攣させた。

「あ……っ♡あっ♡」

そして次にダリウスの鞭が乳首に振り下ろされ、パシンと音が鳴った瞬間、蒼紫は潮を吹き出していた。

「あああ~~~~っ♡♡♡♡」

スーツ越しに色のない水が溢れ出す。その量は少くない。だが一度達したというのに体の熱は治まることを知らずむしろ増していく一方だ。

(今の……なに……)

あまりにも強い快樂に変身が解け白い裸体が晒される。

ピンク色の乳首は大きく育ち、ペニスは潮吹きの名残りで濡れ、その雫が尻穴を濡らしている。

ダリウスは鞭を持ち直すと持ち手で蒼紫のアナルを突いてみせる。

「あっ♡そんな、ところ……っ」

「やれ」

ダリウスが命じると戦闘員が背後に回り込み蒼紫のアナルに舌を押し込んだ。

レロッ♡ジュボッ♡ジュボッ♡ジュボッ♡

「あゝっ♡」

（な、なにこれ……お尻の中舐められてるのに……）

初めて味わう感覚に蒼紫は戸惑いを隠せなかった。

戦闘員の舌が腸内を舐め回し、同時にダリウスが鞭で乳首を押し潰す。

「ああん♡♡あっあっ♡やあっ♡」

（だめえ……♡こんなの知らない……）

未知の快楽に恐怖を覚えるも、体は正直に反応してしまう。

戦闘員の舌が動く度に甘い声を上げてしまい、ダリウスの鞭が振るわれる度に体が快感に跳ねる。

「あ……あぁっ♡」

（こんな奴なんかに……っ）

だがいくら気持ちで抵抗しようとも快楽には逆らえない。逆に感じる

快樂は、激しくなるばかりだ。乳首とアナルを同時に責め立ててくるため、蒼紫はただ悶えることしかできないでいた。

「あぁんっ♡あっあっ♡」

（だめえ……♡こんなの続けられたらおかしくなっちゃうよお）

「ククッ、そろそろ限界か？」

「やあっ！だめええ♡♡♡」

ビクビクとメスイキをした蒼紫に戦闘員の舌技がさらに激しくなる。

「あゝっ！あぁっ♡やぁゝゝゝっ♡」

乳首と尻穴に同時に攻め立てられ蒼紫は何度も絶頂を迎えた。しかし戦闘員は容赦なく舌を動かし続けるため休む暇がない。

（だめえ……こんな奴なんかにイカされちゃうなんて）

悔しくて堪らないのに体は正直に反応してしまう。

ダリウスが鞭を振るう度に、蒼紫のアナルがヒクつき、腸液を垂れ流した。その淫らな姿に戦闘員たちが色めき立つ。

「ふぁ……あぁん……♡」

愛撫が激しくなるにつれて、アナルの奥が疼いてしょうがない。戦闘員はいっしか指を抜き差しし、その技巧はますます巧みなものになり、腸内に忍ばせた手指をくねらせ前立腺を刺激し始める。その指使いに蒼紫は腰をくねらせて身悶えた。

（あぁっ……僕の中いじらないでえ……！）

初めての手マンに蒼紫は戸惑いながらも快感を感じ取っていた。

「あっ♡あぁっ♡」

（だめえ……こんなの知らない）

「そろそろ解れただろう。後から抱えてやれ」

ダリウスの命令に戦闘員は蒼紫を背後から抱え大きく足を開かせた。

「ククク……ケツマンコがひくついているぞ」

「ち、ちが……」

ダリウスがペニスを突き出す。そのあまりにも長く太くそして異常なほどに立派な亀頭に息を飲んだ。

（こんなおっきいの見たこと……）

「ククク……エレメンタルブルーの味はどうだろうな」

太い亀頭がアナルを広げ、蒼紫は尻で行為をしようとしていることに驚き、圧迫感と腸壁を擦られる刺激にゾクゾクとしたものを感じてい

た。

「やだ……っ、おっきいのが、中……っ入って……」

（だめだよ……こんなの入れられたら僕じゃいられなくなる）

首を振ってなんとか快楽から逃れようとする。アナルから流れ込んでくる快感を感じ取り腰を浮かせてしまった。するとそれがいいことにダリウスは一気に肉を押し込んできた。

「ひんっ♡」

（ああだめなのに……おなかの中あったかい……♡）

容赦なく入ってきた男根が結腸口をノックする度、蒼紫の脳裏に星が瞬いた。

ここに入り込んだだけでこんなにも感じてしまうのにピストンされた

ら一体どうなってしまうのだろう……不安と恐怖が入り混じりながらも、蒼紫は無意識のうちに締め付けていた。

ダリウスのペニスが引き抜かれる度、アナルの縁がめくれるほど強く引っ張られて、その刺激にすら感じ入ってしまう。

「あ……ああ……ん♡」

（こんな大きいので突かれたらおかしくなっちゃう）

しかしそんな考えとは裏腹に体は期待に打ち震えている。そしてついにその時は訪れた。

パンッ！と大きな音を立て尻たぶを叩かれた瞬間、脳天まで突き抜けるほどの衝撃が走る。

「ひゃあああああん♡」

思わず悲鳴のような声を上げると同時にぎゅううっとお腹の奥が熱くなる。膣内が収縮して締め上げているのが自分でも分かった。

その反応を見てダリウスは激しくピストン運動を始める。パンツ！パシンツ！バチンツと何度も尻たぶを打ち付けられそのたびにアナルはきゅうっと締まった。

（こんなの知らない……）

痛みよりも快感の方が強い。その証拠にペニスからは先走り汁が溢れ出し、床を汚していたし乳首もビンビンに勃起している。

しかも乳首ではなく蒼紫はアナルに氣をとられている自分に氣付く。腹の下からゾクゾクとなにかが這い上がってきて止まらない。

前立腺をゴリッ♡っとペニスの先端で押し上げられるたびにガクガク

ツと痙攣してまるで歓喜に震えたかのように快樂が体を襲った。

「ひあっ……！ああっ！ダリウスっ……！」

柔らかく熟れた雌穴が、ゾリゾリと侵入してくるペニスを思わず締め付けていた。

「ククツ……いい具合だ、お前の中はな」

ダリウスのペニスが根元まで挿入され、蒼紫は声にならない悲鳴を上げた。腸内を埋め尽くしている質量に息がつまりそうになる。だが同時に言いようなない幸福感に包まれていた。

「あ……っ♡あう……♡」

（僕の中におちんちんが入ってる……）

その感覚だけで頭が蕩けてしまいそうになる。しかしまだ終わりでは

なかった、ダリウスはゆっくりと腰を動かし始めると徐々にスピードを上げていった。

「あっ……♡やだっ……すごっ♡あぁっ♡」

太く逞しい肉棒が奥深くまで入り込んできてゴリッ、グポッとそのたびに内側を圧迫されたまらなく切ない気持ちになる。しかしそれを悟られまいと必死に声を抑える蒼紫だがすぐに限界を迎えた。

（だめ……おかしくなる……）

そんな願いなど関係ないとばかりにダリウスは激しいストロークを始める。一気に頂点へ向け駆け上がるようにしてピストン運動を繰り返した。

「あぁっ♡来ちゃう、来ちゃ……あ、あぁぁーっ♡♡♡」

潮吹きをし絶頂した蒼紫に構わずダリウスは腰を打ち付ける。長大なペニスを根元まで突き刺し、どちゅ♡ぬぷっ♡と激しいピストン運動を繰り返し肉穴を犯していった。その間も大量の蜜が溢れて雄膣を濡らしていた為動くのは容易かったのだ。だがいくら簡単に射精してもダリウスのものは全く衰えることが無かった。

絶頂後で感じやすくなっている尻穴に肉棒を出し入れされ、腸壁をゴリッ！ゴリユッ！と突き上げられる快楽に蒼紫の口から自然と甘い喘ぎ声が漏れ出す。

「あっ♡あっ♡ああんっ♡」

「ククッ……どうだ、俺様のものの味は？」

「あう……♡おっきいのがっ……僕のお尻の中で動いてるよお……」

（こんな大きいのでズコズコされ続けてたらおかしくなっちゃう）

そんな蒼紫の思いとは裏腹にダリウスは容赦なく腰を打ち付けてきた。パンツ！パンツ！という肌と肌がぶつかり合う音が響き渡り、同時に腸内を埋め尽くしていた肉棒が激しく動き始める。その刺激に耐え切れず蒼紫の口から甘い声が上がった。

しかしダリウスは構わずピストン運動を続ける。

「あぁっ♡だめえっ♡」

「すっかりメス顔だな」

「あうっ♡あっ♡あぁんっ♡」

蒼紫の口から漏れる声は快楽に染まったものだった。その声を聞いたダリウスはさらに激しく腰を動かすと、大量の精液が腸内に流し込む。

「ああああ……だめええ♡♡♡」

出されているのに感じる蒼紫は力なく喘ぎ続ける。こうして蒼紫への調教は始まったのだった。

癒し課肉便器

エレメンタルグリーンこと翠川彼方は大手企業○菱の癒し課に勤務する新入社員である。

癒し課と言えば聞こえはいいが、その実情は男性社員の性欲を晴らす肉便器係である。

「う……っ！ んぐうつ！」

「おらっ、もつとしっかり啜えろよ！」

男はそう叫んで腰を突き上げる。喉奥を突かれて吐き気を覚えるもそれすら快楽へと変換されてしまう。

「こっちも忘れるんじゃないぞ」

後ろから尻穴を弄っていた男が指を引き抜くと代わりに男根を挿入してきた。

「んぐううっ!!」

前と後ろ同時に責められて彼方はくぐもった悲鳴を上げる。だがそれも一瞬のことですぐに快楽の波に押し流されてしまう。

「おら、出すぞ!」

男が一際強く腰を打ち付けてきた直後、熱いものが注ぎ込まれる感覚があった。それと同時に後ろの男も射精したらしく腸内が満たされていく感覚がする。

（ああ……いっぱい出てる……）

